

書評 川辺 真詩集『特別な朝』を読んで

自然体から立ち上がる

自由な精神、風刺、ユーモア

洲 浜 昌 三



ほぼ四十年間、『山陰詩人』や『島根年刊詩集』で、川辺さんの詩を読んできた。様々な詩に出会ったが、ひと言でその特徴を表現すれば、どうという言葉があるだろう。

十二月初旬、松江で「しまね文芸」入賞者の表彰式と合評会があり、終わって閻田真太郎さんと車の中で、詩の話しをしながら帰った。

「川辺さんの詩は横へ広がっていく詩だね」と閻田さんが言った。なるほど、そういう表現もあるか、と感心した。

ぼくは、詩ではなく演劇の例を話して、閻田さんの言葉をつないだ。「脚本を書くとき、『深く井戸を掘れ、そうすれば様々な水脈に出会う』と、演劇の講師に言われたことがある」

横に広げて行けば、世界は広く自由で、様々なことに出会い、面白さや楽しさ発見がある。小説やエッセイなどが適した表現形式といえ

る。

深く掘っていけば、世界は狭くなり窮屈で、専門的で難解になる。出会う水脈に発見や楽しさや喜びがあり、独創性や実験性、地平を開く先駆性もあるが、理解者は限られる。

実際の作品は、両者の度合や兼ね合い、濃淡を使い分けて生まれるので、厳密に二分されるわけではなく多種多様であるが、ものを書く時の基本的な姿勢でもある。

では、川辺さんの詩の特徴はどういう言葉で表現すればいいだろう。閻田さんの受け止め方とほぼ同じだが、次のように表現してみた。

「肩の力を抜いた自然体の詩」。物事を見るとき、気負いや気取り、力みがないので、ありのままの自然な精神が伝わってくる。

前述したように、「横に広がる詩」は、小説や随筆に近くなる。場合によっては、「行分け随筆」になりかねない。そうならないのは、長年培われてきた詩的エスプリが随所に滲み出てくるからだろう。

詩集『特別な朝』を手にしたとき、何が「特別」なのか、と思った。両親の他界？結婚記念日？退職？孫の誕生？（マサカ！）

推測は見事に裏切られた。「2015年9月18日安保法制国会強硬採決の朝」である。題そのものが風刺と比喻で巧妙に偽装されてい

るのだ。

作品は全部で二十八篇、七篇ずつ四つのグループに分けられている

I 「特別な朝」―政治や社会へのチクリとした鋭い批判が生きている。

II 「我が町で」―詩人が住む町の動向や歴史の移り変わりなどが細密なスケッチのように描かれていて、とてもリアリティがある。

III 「鏡の中で」―自分自身の勤務のことや友人、家族など身近な素材でエッセイ風に描かれ、何となく行間からペーソスが漂ってくる。

IV 「旅景」―旅先で出会ったことを記録風に詩にした作品で、ユーモアや意外な視点の逆転などが面白い。

ほとんどの作品が身近な生活の場から生まれていて、作者の息づかいが伝わってきて親しみやすいのが特徴といえるだろう。

同時に今回の詩集では、今までになく、比喻や風刺から生まれるユーモアが生きていて、とても楽しかった。風刺は文学の一つの表現形式であり、普遍的なものである。対象に対してダイレクトに怒っては風刺にならない。一定の距離を保ち、怒りや抗議を抑制して、遠回しに、偽装して、巧妙に表現しなければならない。そこに自然にユーモアが生まれてくる。簡単なようで、とても難しい。川辺さんは、それを自然体でサラッとやつてのける。肩に力を入れて構え、力んでないから、スーッと人の心に、笑いと共に入ってくる。

詩を引用すればいいのだが、一部分だけ引用しても川辺さんの詩の魅力は伝わらない。物語性を備えているので、全体の中で部分は生き

てくる。少しながいけど、一篇だけ例にあげてみたい。

「枕」という詩は、講座の人が語る散髪屋の店主とお客との会話を中心にした落語の導入部だが、想定外にお客と店主がケンカになり、二人とも怒って出て行ってしまいます。さてどうなるか。

枕

散髪屋の店主が

熱いタオルを持ちかねて

お客の顔にひつかぶせてしまいます

「ヒヤーツ。おい、何をするんだよ」

「イヤー、熱くて持ってたでなくて」

いつもならここで笑いが起きて(満足して)

次のネタに移るのですが

その日の高座では

「何だつて?」とそのお客が怒ったのです

店主はシヤレにならないことにビックリして

「そんなつもりでは…」と 棒立ちとなります

「火傷したらどうするんだよ」とお客がたたみ掛けます

「いつもはこんなことにならないのですが…」

店主はこの展開が理解できなくて 頭を抱えます

「こんな店 二度とこないからな」

お客は捨て台詞を吐いて出ていってしまいます

高座の人は この場をどう収めようかと

店主に声を掛けます

「どうしたもんかね」

「どうも、どうも あんたがやれつていうから」

「想定外つていうやつだなあ」

「もうあなたの言うとおりにはならないからね」

真つ青な顔をして 店主も出て行つてしまいます

残された講座の人は

「枕が勝手に転がりやがった」とつぶやきます

目の前に座つた客が「クスリ」と笑います

それを見た講座の人は

「お後がよろしいようで」と言つて

座布団を持つて引き込んでしまいます

ところで枕は何処へ行つたのか

もう誰も 気に留めません

この国ではいつものことです

最後の一行は、落語とは遠い別の世界である。しかしこの飛躍でイメージが立ち上がり、落語とは遠く無関係な我が国の国会や政治のいい加減さが浮かび上がり、風刺とユーモアを伴つて詩として広がっていき、思わずニタリと口元が緩み、気分も爽快になる。

作者は同志社大学時代に文集発行に参加したり、手作りの詩集『個

論』や『赤心』を出している。当時は、フォークソングが盛んな時代だったので、川辺さんの詩には、その影響があるかもしれない。

在学中に『山陰詩人』へ加入し、これまでに『個論』（昭和48）

『赤心』（昭和49）『黄砂』（昭和52）『納豆とゴルフと飛行

機』（平成11）『からつばの空』（平成21）などの詩集がある。

川辺さんは、昭和五十三年（1978）から島根県詩人連合の事務局を担当し現在に至っている。更に現在、中四国詩人会の事務局長、

『山陰詩人』の編集責任者でもある。多忙な中で、川辺さんの一貫した支えがあつて、現在の詩人連合の活動が継続されていることを忘れるわけにはいかない。（20190323）

発行所 山陰詩人クラブ 印刷 黒潮社

発行日 2018年10月15日

頒 価 1500円

川辺 真 安来市飯島町1842（山根方）

